

短歌

鈴木永五郎

思ひあまり草堂の徑さまよへばほすきゆらぐ月
白うして
ともすれば胸にもえつる若草の小みちに迷ふわが
思ひかな

加藤たまも

戀を捨てし我行く道を照らすとも見むか細月梅さ
ける宵
白梅や香染め色の袈裟はせる律師がいほにうぐひ
すの啼く

小野春香

したゝかに河水ましてみどりふく柳にけふる春雨
のさと
梅の樓小づゝみ習ふ姫君のさよさみこゑに銀燭ゆ
るゝ

眞末子

うらゝかき空に高なく聲清うひばりさえたり春の
あざわけ

鶯の聲に目さめて窓をせばしら梅さよしありあ
けの月

菅原櫻心

霜の夜を友のかばねに物かたるものゝふすごき太
刀の光りや
うらぶれや冷たかる夜の石にふれて戀も悶も霜と
し凍る

中西欽一

釜の音のたかき一間は炭の香にこもりて床し白梅
のはな
松前や筑紫やむろのうたさゝつ春風二月伊勢の旅
する

朝倉美知

春の日を涙にぬれし緋の小袖さきても花にそえて
送らば
小さざみに女いそげる三條の宵やみくらさ花あ
しかな

春風や京は三十三間の矢こゑもはなの香にゆるさ
かな

吉田秋花

うす霞菜の花寺はくれをうつかね重き音に春たけ
にけり
白梅や瑠璃の戸越にはそ月の光りつめたく春まだ
あささ

○ 掃きすてし妹か造花のかみくすにそいろ雨ふる春
の夕べや
緋のためと縫ふ子しばしは針とめて耳かたむけり
鶯のこえ

伊藤 緒 刀

○ たいよへる匂ひくつしき梅月夜舟と岸とに人わか
れぬる
むらさきのたすきあやどり染糸を子せる小女に梅
ちりかゝる

* 鶯の雛塚つさしゆふべより * 起 雲
しめやかにふる春の雨かな

衣白してさざ橋のぼる夢さよし
梅が香たかきあさ月の窓

(投稿歓迎) (題不定) 伊勢白子局區内眞宮宛

